

パーリ仏教と生命倫理

柏原 信行

近年、脳死者・胎児・クローンからの臓器摘出、安楽死・尊厳死等、生命倫理に関する問題が続出してきた。これらの問題に関して、仏教にも解釈と視点が要求されている。本稿の標題の「パーリ仏教と」とは、本稿がパーリ経典をソースとしたものである事を示す。

臓器移植について 臓器の提供は、布施行為の一種であると解釈できるかもしれない。仏典中では、特にジャータカには、数々の布施の物語があり、その中には、臓器の提供にも通じるような物語もある。

例えば、シビ王ジャータカ (J No. 499) では、ブッダの前王であったシビ王が、自己の外部のものだけではなく、心臓・肉・血といった自己の内部の物や、あるいは自己自身を奴隷として布施をしようと決心をする。帝釈天がそれを知り、盲人の婆羅門に姿をかえて片方の眼球を乞う。王は周囲の反対を押し切り、自分の両方の眼を布施して、王位を退き出家する。しかし、シビ王は出家した後、帝釈天の勧めにより、布施の決意とそれを実行したという真実の言葉の力によって、再び元のように両眼を回復する。その他、自己を捧げるという物語には、次のようなものがある。ササ・ジャータカでは、ブッダの前生のウサギが、飢えたバラモンに与える物が無かったので、焚き火の中に飛び込んで自らの肉体を施食として提供している (J No. 316)。チャンペツヤ・ジャータカ (J No. 506) では、ブッダの前生のチャンペツヤ龍王が、皮を剥ぎたい者や大道芸用に捕らえたい者に、自身を施物として差し出している。

これらの行為は、自己の肉体やその一部を提供したという点では、現代の臓器の提供に通ずるようにも思われるかもしれない。しかし、自己を犠牲にしてまでおこなわれる布施は、いずれもブッダの前生であるボーディサッタの行為である。

これらの物語の主題は、ボーディサッタの偉業の讃嘆であって、読者や聞き手に同様の布施行為を求めているのではない。

仏弟子のアーナンダが、前生で自己を犠牲にしてブッダを守ったという物語が、

ローハンタ鹿・ジャータカ (J No. 501) やハンサ・ジャータカ (J No. 502) やハンサ・ジャータカ (J No. 533) に見られるが、自己の肉体までも犠牲にして布施を行うという物語は、ブッダ以外の者を主人公にしたものには見られない。

自分の両眼を布施したシビ王の物語は、ミリンダ・パンハーに取り上げられている (Mil 119)。ここでの主題は、両眼をなくしたシビ王に天眼が生じた根拠である。その根拠を表すものとして挙げられているのは、火を消したり毒を解毒剤に変えたりする呪文や、大波を引かせた誓願や、ガンジス川を逆流させた誓言であり、いずれも超自然的な真実の力を持つものである。シビ王が天眼を得たのも誓言の力によるとされている。

現在、上座仏教圏では、スリランカ、タイの北部から西双版纳に至るまで、ヴェッサンタラ・ジャータカが、非常に人気がある。このジャータカは、ブッダの前生であるヴェッサンタラ王が、自国の象を隣国に与え、王位を退いて妻子と共に森に入り、ついには乞われるままに妻と二人の子供をバラモンに与えてしまうという物語である。タイでは、特別の日にタイ語やランナータイ語に逐語訳されたヴェッサンタラ・ジャータカが読誦される。スリランカではウエサック (vesaka) に子供によるヴェッサンタラ・ジャータカ劇が上演される。これらは、この物語を見聞きしてブッダの偉業を賞讃し、随喜することによって功德を得るのを目的としている。印度でも、ラーマ王の聖地などへ参拝した者の土産話を聞くことによって、参拝した本人と同等の功德が得られるとされる。アングリマーラ・スッタ (M No. 86) の中では、ブッダに諭されて殺生を止めた元盗賊アングリマーラの「自分は、聖なる生を受けてから (ブッダに帰依してから) は、故意に生類の命を奪ったことはない。」という文句が妊婦に安産させる力を持ち、パリッタとされている。

ジャータカ中の布施行の物語も、これらと同様の意味を持つと捉えねばならないであろう。従って、臓器移植という布施行の範が、ジャータカに見られるとは言い得ない。

安楽死について 律には、投身自殺を禁ずる項目がある。ある時、一人の比丘が、病苦に耐えかねて崖から身を投げて自殺をしたが、生憎ちょうどその時その崖の下を通りかかった旅人の上に落下して、その旅人も巻き添えで死んだ。このため、「比丘は投身自殺をしてはならない」という項目が規定された。(Pārājika iii p.82) ここでは、自殺そのものを禁じているのではなく、殺生をおこす虞のある投身を禁じているのである。

ミリンダパンハーでは、この戒について、比丘は衆生の利益を図らなければならないので、投身自殺をしてはならないが、諸々の苦から逃れるためには認められる、とされる。ここで言われる諸々の苦とは、生老病死、愁悲苦憂悩、愛別離苦、怨憎会苦、父母・兄弟・姉妹・妻子・親戚の死、親戚・健康・財産・戒・見をなくすこと、王・盗賊・敵・飢餓・火事・水害・波・渦・鱗・非難・処罰・墮悪趣・大衆・生計・死への恐怖、具体的な26通りの極刑の苦しみである。

律には、投身自殺についてのこの規定以外には、その他の方法による自殺については何も触れられてはいない。

相応部には、次のような話が記されている。アラカンとなったが病苦に苦しむ比丘が、その苦しみから逃れるために刀剣で自らの首を切り自殺した。その上に黒雲が渦巻いているのを見て仏弟子が釈尊にそのわけを尋ねると、釈尊が言われるには、その黒雲はアラカンの魂を食おうとしてやってきた悪魔である。漏の尽きたアラカンの魂は既に滅却され、魂が見つからない悪魔は魂がどこにあるのか捜しまわってアラカンの遺体の上を飛び回っていた (S 4.3.3)。病苦のために自刃した比丘については、このほか、相応部の別の箇所 (S 22.87) や中部 (M 144) にも見られる。

これらの資料から、病気による苦痛から逃れるために生命を絶つこと即ち安楽死が認められていると言えるようではある。しかし、いずれの例も、自殺したのは普通の衆生ではなく、比丘であり、アラカンである。

ミリンダパンハー (Mil 145) では、「全ての者が刀や棒を恐れ、すべての者が死を恐れる。」という場合の「全ての者」にはアラカンは含まれないとされる。

死を恐れないアラカンであればこそ、自らの生命を絶ったのであり、死を恐れる全ての者に、苦から逃れるための安楽死をそのままあてはめることは困難であろう。或いは、上述のような具体的な苦に該当しなければ、自ら安楽死を願うことは衆生の利益に反するため、禁止されることになる。

死について 死については、ヴィスツディマツガ第8章の随念業処の中の死念の解説で、死を「一つの存在に於ける命根の断絶」としている。そして、死の種類については、福または寿またはその両方が尽きた場合の「時死」と、それまでの業を断絶する別の業による「非時死」の2種類があるとす。これらの2種類には、アラカンが輪廻の苦を絶つ「正断死」と、諸行の刹那滅である「刹那死」と、樹木の枯死や胴の死 (鏑) を指す「世俗死」は含まれない。「福が尽きた場合の死」とは、生命を存続させる条件が整っていても、次の生をもたらす業の果によって

おこる死である。趣や時代や食や地域によって百歳までという寿命が尽きることによる死が「寿が尽きることによる死」である。即刻その場で死ぬような結果をもたらす業のために刀で切られたりして死んだりするのが「非時死」である。

これらの各種の死の定義を見ると、アラカンの苦からの逃避の為の死は、通常の死と同列には扱われておらず、業による果をもたらさない樹木や金属と同様に扱われている。

ヴィスツディマツガでは、自己の肉体が他の人々と共通である点を観察して、自らも必ず死に至ることを観察すべきであるとされる。ここで言われる共通点とは、表皮や深皮や肉や骨や髄にいる80の虫と、数百の病気が身体内にあり、身体の外には蛇や蠍などの死をもたらすものがあるという点である。

また、夜に思惟すべき死の原因として、蛇・蠍・百足に咬まれること、転倒、食べたものの腐敗、胆汁・痰・風の乱れが挙げられている。

ここに見られるように、ヴィスツディマツガでは、病気等の死因は内的な原因によると捉えている。臓器の移植や交換による内的原因の排除による延命は考えられてはいない。

また、寿命は、呼吸の停止、威義（行住坐臥）・温度・大種（地水火風）の不均衡、食が無いときに尽きるとされる。命の長さ、死の原因となる病の種類、死の時期、死に場所、転生する先の趣は定まっていないともされている。また、死念の修習は、自己の死が一日・一夜・一回の食事時間・ものを四五口食べる時間と捉えるだけでも放免とされ、死は一口を食べる間、或いは一呼吸の間にも訪れるものであると捉えなければならない（A viii 74 引用）とされる。

このように、ヴィスツディマツガによれば、死は、常に自己に内在する原因によるものであり、非常に身近なものとして捉えるべきものである。

ところで、自己の消滅の願望は、漢訳資料（集異門論四他）では非有愛（vibhava-tāṇhā）として、欲愛（kāma-tāṇhā）と共に渴愛とされている。しかし、ヴィスツディマツガではこの3種類の愛を苦集聖諦とし（Vism 506）、それぞれ、六境に対して愛好するのが欲愛であり、断見と共に起こるのが非有愛であるとされる（大念処経 Dii 307; Vism 506, 567）。パーリ仏教では、非有愛は、自己そのものではなく、自己の認識の消滅への欲望と定義づけている。

殺生について 離殺生のパーリ語“pānātipātā veramaṇi”の語義は、「呼吸あるものを倒させること」であり、クローンや脳死者からの臓器の摘出や自殺には殺生が該当するが、胎児からの臓器摘出には殺生が該当しないことになる。アラカンや

ボーディサッタの自己の生命を絶つことは殺生とはされていない。親や先祖から受け継いだ命、或いは宇宙に遍満する生命を尊ぶという概念は、ここには存在しない。

生命観について 命 (jīva 生命) と身 (kāya 肉体) が一体であると捉えるのは断見 (uccheda-dit̥ṭhi) であり、別であると捉えるのは常見 (sassata-dit̥ṭhi) として退けられる。これらの見解を離れた中道では十二縁起に従って有・生・老死を捉える (Sii 61 etc)。

パーリ大涅槃経では、いかに愛する者にも、必ず別れがあり、生じ存在し作られ壊れるものが、壊れないという道理はない、として死が当然のこととされる。

パーリ仏教では、死心とこれに連続する次の結生心は同一の心である。心は活動しているときには善悪の意業となり、その時の心が同類の次の心を引く。死と次の生の心は、このようにして生じた休止中の心 (有分心) である。

ミリンダパンハーでは、輪廻をマンゴーの樹と果実に譬え (Mil 77)、輪廻の主体について、名色 (nāma-rūpa) は死と共に終るが、業によって次の名色が生ずるとしている。 (Mil 46)

パーリ仏教においても、厭われるのは自己に内在し身近なものである死ではなく、苦に満ちた輪廻をもたらす悪行である。ここにも、生命の尊厳という概念はない。

また、輪廻の苦をもたらす肉体は生命を以て維持すべきものではない。ヴィスツディマツガでは、死念を修習する比丘は死に対する恐怖を克服し、身至念を観察するものは生命にかかわる苦をも耐え忍ぶ、としている。

結び 以上のように、パーリ仏教では、臓器移植による延命も、安楽死・尊厳死による寿命の縮小も認めがたい。かえって死の恐怖という苦に対峙してこれを克服すべきであるということになる。

パーリ・テキストの成立した時代と現代、パーリ仏教の流布する地域と日本とは、時間的にも空間的にも、歴史的にも風土的にも、文化的背景が大いに異なる。従って、現在のわが国における生命倫理に関する諸問題に対しての解答例を、そのままパーリ・テキストに求めるのは困難である、と言わざるを得ない。

〈キーワード〉 パーリ、命、殺生・自殺

(龍谷大学講師)